

## ボヘミア前史

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 進藤, 牧郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/37232">http://hdl.handle.net/2297/37232</a>                         |

# ボヘミア前史

進藤 牧郎

私がチェコ史に関心を持つようになってからも、すでにかんがりの時が経過してしまった。チェコ民族が、ヨーロッパの中央、ボヘミア<sup>1</sup>モラヴィアの地に定住して以来、一つの小民族として、この世界史を生き抜いてきた、いわばこの民族の歴史における生命力の源泉を辿って見ようと思う。

一般にはチェコスロバキアは、東西ヨーロッパの接点という観点から見られる。<sup>(1)</sup>ことに今に残るブラハは、チェコ人たちが自負するように、ヨーロッパの中央に位置し、パラツキー的な歴史観が示すように、中世以来の伝統的なヨーロッパの歴史を物語っている。<sup>(2)</sup>

しかしプラハの街を出て、農村を訪れ、ヴルタヴァ（モルダウ）の流れに潤うチェコの国土をめぐる、モラヴィア、さらにスロバキアの農村にまで足を延ばすとき、ヨーロッパとは何か異質なものを感じたのである。それが西欧に対する東欧なのであるか、あるいは極端に言えば、ヨーロッパではないという意味での『アジア』<sup>(3)</sup>というもののなかであるか。

たしかにチェコ民族がボヘミア<sup>1</sup>モラヴィアの地に定着してからも、中世を通して、フン・アヴァール・マジヤール・モンゴル等、汎山のアジア系、正確にはユーラシアの草原遊牧諸民族による度重なる侵入と支配を受けている。それにもかかわらず、その支配の実態については、まったくといってよいほど明らかにされていない。何らか

の形で、これがチェコ民族の素質、歴史的に形成された素質のなかに刻み込まれているのではなからうか。

さらにチェコ民族が、この地への定着以前に積み重ねてきた歴史的体験とはどんなものであったのであろうか。とくに言語を含めて民族の素質のなかに刻み込んできたものは、何であつたろうか。今日までの考古学の成果によれば、ボヘミア・モラヴィアの地に人類が登場するのは、およそ二〇万年前とされ、ここでも長い先史時代以来の歴史をもつのである。たとえそれぞれの時代において、この長い歴史の一齣を担った民族は異つてはいえ、チェコ民族はその歴史的遺産を継承せざるを得なかつたといえよう。

チェコ民族の歴史を、そしてボヘミアを舞台に展開されてきた歴史を、いわばその原点にまで遡ろうとすれば、世界史の源流を求めることにもなり、言葉を代えれば、世界史の形成過程のなかで、チェコ民族の、そしてボヘミアの歴史を位置づけることにもなるう。

(1) たとえば、拙稿『ドイツ近代成立史』勁草書房、一九六八年(第三刷、一九七九年)参照。G・バラクロウ編『新しいヨーロッパ像の試み——中世における東欧と西欧——』刀水書房、一九七九年。東西ヨーロッパのいわば新しい統合への試みといえよう。

(2) 拙稿『現代チェコ人の歴史意識』『歴史評論』一九七七年九月号所収。

(3) 一八四八年三月革命の時代、マルクスやエンゲルスも含めて、ヘーゲル左派の人びとが、どういう意味を含めて「アジア的」という言葉を使ったか。たとえば良知力『向う岸からの世界史——一つの四八年革命史論』未来社、一九七八年(第三刷、一九七九年)三一頁以下、とくに四二頁。こうした点はマルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』国民文庫版を、とくに「アジア的形態」を読む時には留意すべき点であらう。

## 二

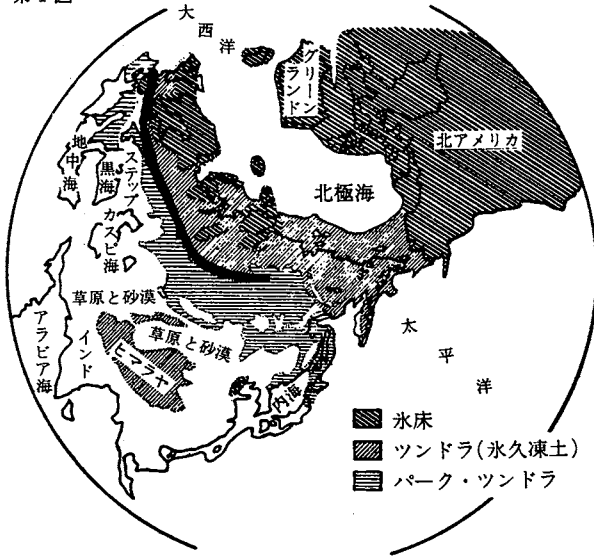
一九六〇年代以来、恐らく公式に、チェコスロバキアの小史を執筆してきたフランティシェク・カフカ František

Kavkaによれば<sup>(1)</sup>、ボヘミアモラヴィアの地域に人類が住みはじめたのは、先にも触れたように、およそ二〇万年前、ネアンデルタール人とされる。こうした旧人類はともかくとしても、最後の氷河期、ヴェルム氷期にあつても、ボヘミアモラヴィアは、スカンディナヴィア（北極）氷河とアルプス氷河の間にあつて氷河に覆われていない地域であつた。それだけに寒冷期に特徴的な寒系大型動物、とくにマンモス、ほかにサイ・トナカイなどが多かつた。旧石器時代も後期、およそ七万年から一万年前にかけて、マンモスの春秋の移動路にあつていたモラヴィアからは、中部ヨーロッパでは、この時代として最大のプシエドモステイ Pšedmosti u Přerova の居住址が発見されている。<sup>(2)</sup>このマンモスハンターたちは「幼獣をふくむ一、〇〇〇頭分ものマンモスの遺体」を残し、「集団的な狩猟をした結果」だといわれている。<sup>(3)</sup>

さらにこの同じモラヴィアから旧石器時代を象徴する女人像、いわゆる「旧石器時代のヴィーナス像」も発見されている。<sup>(4)</sup>ヴィエストニツェのヴィーナス Dohni-Vestonická Venuse とペトジコヴィツェのヴィーナス Ostrava-Petkovická Venuse である。江上波夫氏によれば、こうした旧石器時代のヴィーナス像は、東はバイカル湖から西はピレネー山脈にかけて東西に連つて出土し、しかもその発源は東欧にあると推定されている。ヴィエストニツェのそれは南モラヴィアの黄土（レス）遺跡、居住址からの出土で粘土よりの煉物像で、オーリニヤック期とされればかなり早い時期となるが、しかしウクライナの遺跡出土品との類似からソリユートレ期あるいはマドレーヌ期まで下がる可能性もあるといわれる。ペトジコヴィツェのそれは、オドラ（オーデル）川の源流に近い北モラヴィアの竪穴住居址からの出土で代赭石像で、時代もオーリニヤック後期ないしソリユートレ期と推定されている。<sup>(5)</sup>

このヴィーナス像の出土分布を結ぶ東西線は第 1 図におけるヴェルム氷期における北極氷河の南縁に続くツンドラ地帯とその南に広がるパークツンドラ地帯との境界線とほぼ重なる。およそ一万年前を境に後氷期に入つて、地球の気候も温暖になり、氷河の後退につれ、紀元前三〇〇〇年ごろまでにはツンドラに代つて、今日に見られるよ

第1図



(第1・19図 パークツンドラの分布。)

川井、他『人類の現われた日』53頁。

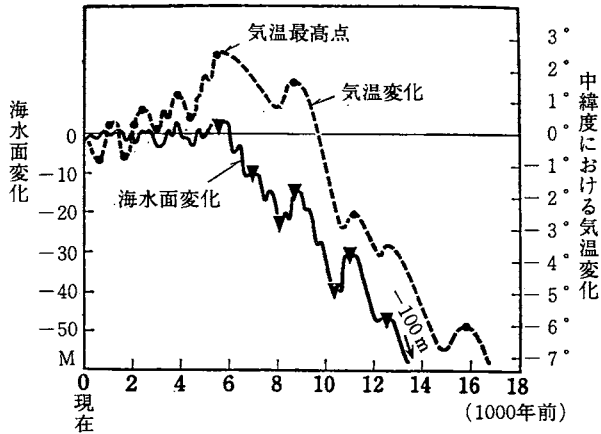
——は、江上「東西交渉のあけぼの」10頁所収の図「旧石器時代ヴィーナス像の分布図」に対応させて、筆者が挿入したものである。

うなシベリアリタイガ地帯が現われ、その南にユーラシアを東西につなぐステップ地帯が形成される。ヴィーナス像の東西線も、このタイガ地帯の南縁に重なるのである。<sup>(6)</sup>

北ヨーロッパにおいても、植生が変わり、森林が北上して、そこに棲む動物相も変わる。寒系のマンモスなど大型動物に代って、シカ・イノシシ・クマなど比較的小形の動物が現われる。海面も上昇し、ようやく今日の海岸線に近づくにつれ、低地部やとくに東ヨーロッパの大河流域には沼沢地、あるいは広範囲にわたる湿地帯も生れ、狩猟における槍、とくに弓矢の発明に加えて、銚や釣り針の改良など漁撈の技術も改善され、人類も北海沿岸からバルト海沿岸の奥地まで進出するようになる。人類の歴史にとって画期的な変革、農耕と牧畜のはじまりを意味する新石器時代の到来は、このボヘミア<sup>(7)</sup>モラヴィアでは紀元前三〇〇〇年ごろとされる。中石器時代も後期に

Voluntkeramik として知られた彩文土器がドニエプル・ドナウ地方の彩文土器と中部ヨーロッパの渦文土器のなかで保持された、となつていない、とされている。

第2図



(第1・22図 中緯度における気温変化)

川井他『人類の現われた日』59頁。

入り、温暖化が進むにつれて森林の性格も変わり、針葉樹林から常緑広葉樹林、さらに落葉広葉樹林へと変化し、人びとはこの新しい森林における狩猟・漁撈の生活から、漸次農耕や牧畜(cattle-breeding)へと移行する。後氷期に入つて温暖化を進めてきた気温の変化も、第2図のように中緯度地方において、およそ紀元前七千年紀に現在に比べて二度近くまで高まり、再び一時わずかに寒冷化した

が、紀元前四〇〇〇年ごろには、現在に比べて三度近く、気温はこのころ最高点に達した。その後は、振幅を伴いながら寒冷化が進み、今日に至っている。(8)

紀元前三千年紀、ボヘミア地方の新石器時代について、カフカの記述を追ってみよう。(9) 先ず、(1)ボヘミアの農耕文明は、後にこの上にスラブ人の農業を發展させた。(2) この農耕民は、いわゆるドナウ文化を担う大きな集団に属し、(3)その後、中部ヨーロッパ領域において渦文土器

こうした人びとは、最も豊かな地方に定住し(5)かなり稠密に集って村落をつくり、木でつくられた、かなりの広さをもった長方形の住居に住み、その壁は小枝を編んだもので、(6)原始共同体 *Urgemeinschaft* の時代にとって特徴的であった。(6)女人像崇拜は、なお母権 *Matriarolat* の時代が続いていたことを示す。

(7)すでにあらゆる主要な穀物の種類やサヤメ類 *Hilfsfrüchte* を知っていた農耕とならんでまた(8)牧畜 *cattle-breeding* ともならんで(9)手工業も、たとえば窯業や簡単な素材を使つての織布も発達しはじめていたといふ。

カフカは、さらに加えて、新石器時代後期において、(10)東南からの民族の影響が増大し、彩文土器の分布がモラヴィアへまで及び、(11)当時、東南ヨーロッパは最も高いヨーロッパ文化の焦点であつた。(12)地中海や黒海の沿岸地域において、すでに文明が開花しはじめ、この文明からギリシア文化が発展したと述べるのである。

このカフカの要約には、新石器時代という人類史上最も激しい変革期だけに、いわば世界史の形成過程とも関わつて、多くの問題が含まれている。カフカはこの農業をスラブ人の農業に、その担い手をスラブ人の祖先に結びつけている。しかもドナウ文化を介してであれ、ドニエプル・ドナウ地方もしくはドニエプル・ヴィスラ地方にまで、地域的に拡げる。さらには後期における東南ヨーロッパの文化を、地中海・黒海沿岸地方の文明、そしてそこから発展したギリシア文化にも結びつけるのである。ポヘミア地方に限つても、ここの新石器時代人の社会構造、その基礎となる新しい農業・牧畜に言及していることにならう。

世界史の上で、一般に最も古い新石器時代の遺跡には、パレスチナのイエリコや東イラク、ザグロス山脈山麓のジャルモなど、メソポタミアを三日月型に取り囲む高原山麓地帯の遺跡があげられ、紀元前八〇〇〇年から六〇〇〇年とされている。ポヘミアからは遠く離れているにしても、年代では五千年から三千年のひらきがある。たとえポヘミアにおいて、農耕・牧畜が自生し得たとしても、その間に農耕・牧畜の伝播の問題を考えざるを得ない。取り敢えず、この問題から取り上げてみよう。

- (1) František Kavka, An Outline of Czechoslovak History, Orbis-Prague, 1963. ; do., Die Tschechoslowakei. Abriss ihrer Geschichte. zweite ergänzte Auflage. Orbis-Prag, 1963. ; do., Geschichte der Tschechoslowakei. Kurzer Abriss. Orbis-Prag, 1968; do., Dějiny Československa I. do roku 1437. Praha, 1964.
- (2) F. Kavka, "Outline." p. 8; do., "Abriss." S. 8; "Československá Vlastivěda Díl II. Dějiny-svazek 1. od osídlení Cs. území do R. 1781. Orbis-Praha. pp. 26-29.
- (3) 湊正雄監修『日本の自然』一九七七年、平凡社。一四七頁。マンモス＝ハンターたちの実態が、日本における野尻湖発掘によって明るみに出るとすれば興味深き。F. Kavka, "Dějiny." p. 22f.; do., "Dějiny-svazek." pp. 26-29.
- (4) F. Kavka, "Outline." p. 8; do., "Abriss." S. 8.
- (5) 江上波夫「序章 東西交渉のあけぼの」『漢とローマ』東西文明の交流Ⅰ』平凡社、一九七〇年、九頁—三二頁所収。とくに、一八頁—一九頁、三一頁。
- (6) 第1図は川井・藤・他『人類の現われた日』ブルーバックス、講談社、一九七八年、五三頁。江上「前掲論文」一〇頁の「旧石器時代ビーンズ像の分布図」と対応させると明確となろう。
- (7) F. Kavka, "Outline." p. 8f.; do., "Abriss." S. 9.
- (8) 川井・他『前掲書』五九頁。
- (9) F. Kavka, "Outline." p. 8f.; do., "Abriss." S. 9f.

III

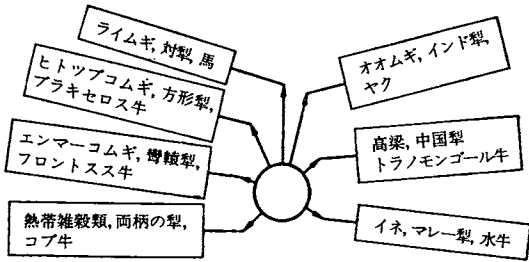
この「農業の伝播」について、飯沼二郎氏は、とくに歴史のなかにもつ風土の意味を取り上げるなかで、いくつかの新しい提案を試みている。<sup>(1)</sup>飯沼氏が『農業文化の起源』として翻訳されたエミール・ヴェルトの研究成果を紹介するなかで、とくに人類最初の農業が、どのような風土的条件・農業技術の発展のなかで、北ヨーロッパに流れ、ゲルマン型といわれる有輪犁による、いわゆる三圃制農法にまで到達するか、をも辿っている。

ヴェルトの原著名『掘り棒、鋤そして犁』Grabstock, Hacke und Pflug (1954)が象徴的に示すように、農業を「ただたんに農耕や家畜飼育のみではなしに、そのほか、織機や土器、醸造の方法、家畜の種類やその利用方法、道具の柄のつけ方、住居の形態など、あらゆる種類の物質文化の複合体（ヴェルトは、これを「文化複合」とよぶ）としてとらえようとするところにある」とした上で、農業以前の「狩猟・採集文化」から、農業は「鋤農耕文化」、ついで「犁農耕文化」に発展すると考える。<sup>(2)</sup>この発展を、気温の変化、氷河期から後氷期への気温の温暖化を基軸とした風土的条件の変容に対応させるのである。

そうとすれば、農業は、まず気候的に恵まれていた熱帯地方で鋤農耕として発生し、より恵まれていない温帯地方に、それをひろめていく努力の過程のなかで犁農耕として発達した。したがって鋤農耕文化の発生地はバナナやイモ類などと小家畜（鶏・豚・山羊・犬など）の野生種のいた旧インドおよび東アジアに想定され、犁農耕文化の発生地は、ムギ類や熱帯雑穀類などと牛と犁の原産地とされる旧インド西北部からアフガニスタン、中央アジアにかけての地域を考え、これを農耕文化の第一次中心地とする。さらに伝播していく過程で、新しい作物が加わり、とくにそれが累積する地域を第二次中心地とすると、鋤農耕ではアメリカとなり、トウモロコシ・バレイショ・タバコなどが加わる。犁農耕の第二次中心地のうち東アジアからアワ・キビ・ダイズ・チャ・クワ恐らくイネ（コメ）等が、そして東北アフリカ（エチオピア地方）からはコーヒー・リベットコムギ・テフなどが加わった。本稿にあって直接関係のある、中近東・地中海地方からは、ヒトツブコムギ・エンマーコムギ・ライムギ・エンバク・ダイコン・メロン・オリーブなどが加わったとされている。なかでも犁農耕の発生地からの七つの流れが、それぞれ伝播していく地方の気候・土壌の状態など風土的条件に応じた代表的な穀物と犁の形とが結びつけられて図示されたのが、第3図である。<sup>(3)</sup>

このうち北ヨーロッパへの三つの流れを中心に、さらに「ヨーロッパにおける犁と最古の穀物の分布」も図示さ

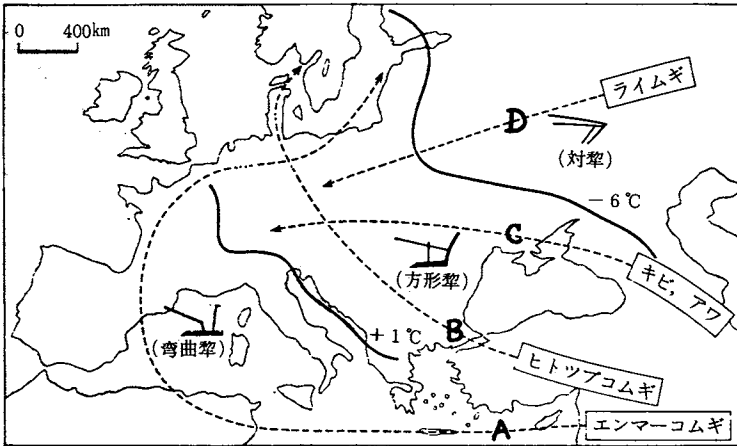
第3図



(図5 犁農耕の発生地から放出した主要な犁農耕文化)の流れ(E. Werth)

飯沼『風土と歴史』31頁

第4図



(図1.10 農耕の拡大とインド・ゲルマン語族の形成(ヴェルトの図より簡略化))  
図中の温度は1月の平均気温。

鈴木・山本『気候と文明・気候と歴史』19頁

A～Dは著者が挿入したものである。

れているが、この同じ図を簡略化し、犁の形を添えた図をここでは第4図として掲げておこう。この図は、鈴木秀夫氏によるもので、「農耕の拡大とインド・ゲルマン語族の形成」とを関連させるために利用されている。なおA、Dの記号は、説明の便宜上、私が挿入した。<sup>(4)</sup>

Aの経路を辿る農耕はオオムギを伴って温暖乾燥地に適応するエンマーコムギと乾地農業に適した彎曲犁（彎轅犁）を使用している。第4図からもわかるように、オリエントからギリシア・ローマを経て西ヨーロッパに入り、ヨーロッパの中石器時代、気温が最高点に達した紀元前四〇〇〇年ごろまでには北ヨーロッパからバルト海にまでひろがっている。

Bの経路を辿る農耕は、エンマーコムギよりは寒地に耐えるヒトツブコムギと方形犁が結びつけられ、この犁はより湿潤地の土壤に適應し、犁鏝（すきへら *Pflugsohar*）を持ち、土を反転させ、後に車をつけて有輪犁 *Räderpflug* に發展する。この農耕が中部ヨーロッパにおいて、Cの経路をとるキビ・アワなどを加えるにしても、この穀物の発生地は、飯沼氏の文中からは、犁農耕の発生地と考えられるので、この間の伝播の経路をどのように考えたらよいのであろう。この穀物は夏作であらう。B・Cの経路を経た農耕は、中石器時代も終りに近く、気温が寒冷化しはじめるところから、新石器時代にAの農耕と重層的に重なり合ったことになる。

Dの経路を経た農耕は、その他の犁が牛によっているのに対して馬が登場し、寒冷地に耐えるライムギと結びつき、さらに寒冷化が進む、新石器時代も後期になって中央および北ヨーロッパに伝播したものとならう。ただこのライムギも、すでに犁農耕の発生地あるいは第二次中心地に見られ、この場合だけ牛が消えて馬に代わり、馬と対犁の結びつきがライムギを栽培するなかで、どこで生れたことになるのであろうか。

カフカの記述を補完する意味で、ポヘミアにおける新石器時代前半の穀物の種類、併せて家畜の種類をもあげておこう。ゲルハルト・ミルデンベルガーによれば、<sup>(5)</sup>オオムギ・エンマーコムギ・小さなコムギ *Zweigweizen*・キビ

などであり、家畜としては牛・豚・羊・山羊・犬があげられ、まだ馬はあげられていない。穀物にあつてもライムギはもちろん、同じように発生地ではあげられても青銅器時代に入つてさらに気温の低下が進むなかで現われるエンバク、そして恐らくはエンマーコムギの品種改良によるスベルトコムギも現われてはいない。穀物の品種名についての記述が、時代が進むにつれ見出し難くなるので、飯沼氏のような方法で、農業を取り上げるとは、本稿では、先史時代だけに限らざるを得ない。

- (1) 飯沼二郎『風土と歴史』岩波新書、一九七〇年(第一一刷、一九七九年)、同『歴史のなかの風土』日評選書、日本評論社、一九七九年。
- (2) 飯沼『風土と歴史』一四頁。
- (3) 『同書』三二頁、三三頁。
- (4) 『同書』三頁図7参照。ヴェルトの図を簡略化したものとして第4図を掲げたが、これは鈴木秀夫・山本武夫『気候と文明・気候と歴史』朝倉書店、一九七八年(第二刷、一九七九年)一九頁。
- (5) Gerhard Mildenerger, 'Vor- und Frühgeschichte der böhmischen Länder' in "Handbuch der Geschichte der böhmischen Länder I." Stuttgart, 1967, S. 39.

#### 四

飯沼氏は、今までの論議の進め方からみても、農業の伝播・展開を、いわば発生的には一元的にみている。しかし伝播の過程で、とくに取り上げている犁の形では、なかでも乾燥型と湿潤型とを区別し、重視している。農業の基本にかかわるからといえよう。

乾燥地帯、湿潤地帯あるいは亜湿潤地帯という形で、いわば風土帯を分ける発想は、先史時代から前近代社会を取り上げる場合、その狩猟・牧畜・農業に及ぼす影響力が決定的であるだけに、誰しもが考えることではあろう。

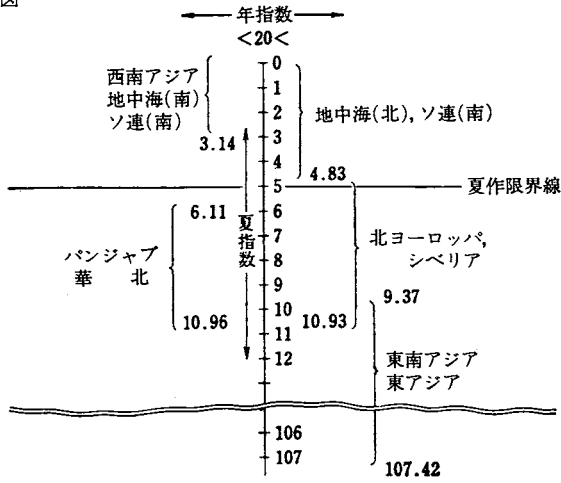
しかし、たとえば松田壽男氏のように、それぞれの風土に根ざした地域に、多元的な、いわば異質の文明が発生することを前提として風土帯を取り上げるばあい、そこには、この多元的な文明の、いわば交渉史のなかで世界史を構成しようとする意図が大きく働いている。<sup>(1)</sup>しかしこれに対して、同じように乾燥地帯と湿潤地帯を区別するにしても、飯沼氏の場合は、一元的に発生した農業の、発展・伝播の条件として考えている。森林・草原・砂漠といった外見からだけではなく、農業にとって不可欠な水の問題から乾燥・湿潤を問題にし、その立場から乾燥度を指数で現わすのである。

犁農耕では「乾燥地では、主として地面からの水分の蒸発をふせぐために、土を浅くたがやし、地中の毛細管現象を切断」し、保水のために犁が使われ、「湿潤地では、犁は、主として雑草を除去するために、土を深くたがやし、かつ、それを反転するのにもちいられる」いわば中耕除草のためという。弯轅犁と方形犁のちがいでもある。<sup>(2)</sup>

そこで乾燥地と湿潤地とを区別する基準としての乾燥指数  $I = \frac{P}{T} \times (T + 10)$  を取り上げる。I は乾燥指数、R は一定期間の降水量、T は同じ期間の平均気温。年の乾燥指数が二〇以上なら湿潤地、以下ならば乾燥地とする。しかし農業にとって直接関係するのは、年間ではなく、夏作の場合は春から秋にかけての気温と雨量であり、冬作の場合は冬の間の雨と気温であらう。とすれば夏に限っての乾燥指数が五以下であれば夏作は不可能となる。こういうことから、年指数二〇と夏指数五を基準として組合せたのが第5図であり、その分布を示したのが第6図であった。<sup>(3)</sup>

この両図を第4図に対応させれば、乾燥地に発生した犁農耕は、北ヨーロッパへの流れのなかで、湿潤地、しかもより寒冷的な森林に覆われた、おそらくは水辺の地区へと農耕が伝播し、その風土に適應していく。ことに乾燥地から湿潤地への移行過程が問題とならう。犁の形のちがいはもちろんとして、夏作が不可能な乾燥地から、夏の乾燥指数も五以上、年間の乾燥指数も二〇以上の湿潤地へと移行すれば、エンマーコムギは別としても、他の穀物の

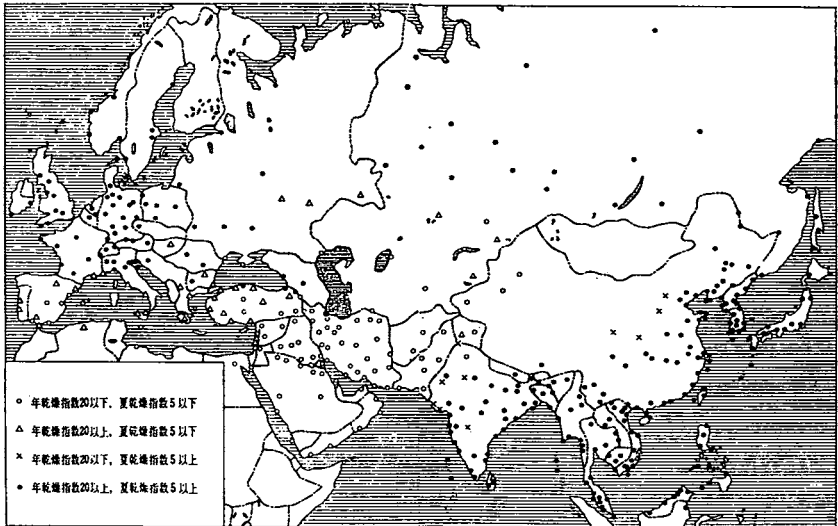
第5図



(表2 マルトンヌの乾燥指数(飯沼))

飯沼『風土と歴史』44頁

第6図



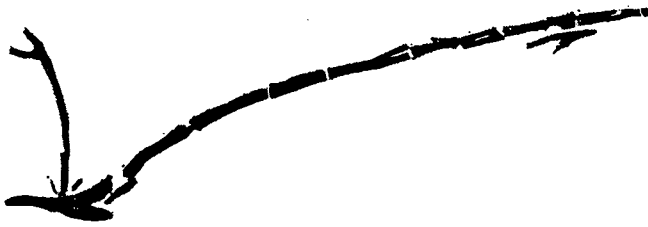
(図8 マルトンヌの乾燥指数(飯沼))

飯沼『風土と歴史』42-43頁

夏作も可能となるのである。

第4図におけるAの経路は、とくに西ヨーロッパ先史時代における巨石文化、ついで鐘形杯文化といわれる中石器時代から新石器時代にかけての文化の北上の経路と重なっている。<sup>(4)</sup> 飯沼氏は、このA経路、エンマーコムギ<sup>(4)</sup> 弯轆犁の経路については、古代メソポタミア・エジプト、ギリシャ・ローマそして「北ヨーロッパ中世の農業」というように、かなり詳細に述べている。たしかにドイツで発見され

第7図



Walle の犁(東部フリースラント)ドイツで発見された最古の犁で、紀元前約1750年頃のもの。一本のオーク材でつくられたその主要部は、長さ3mの轆(Deichsel)と、それに鋭角にとりつけられた長さ約60cmの犁底(Sohle)とから成る。轆の前部には、轆獣の牽引具をつけるための木製の鉤(Holzhausen)が一つみられ、犁底には、轆をはめ込むためにあけられた穴がある。(ハノーバー農業博物館所蔵)

アーベル『ドイツ農業発達三段階』27頁

た最古の犁、(第7図) 約紀元前一七五〇年ごろのものとされている犁は、東部フリースラントで発見され、飯沼氏のいう弯轆犁<sup>(5)</sup>であった。農法の上では、いわゆる二圃制「休閒と冬作」というパターンであり、たとえば南フランスでは中世後期に至るまで続けられているのである。こうした農法が、中石器時代の北ヨーロッパにおいて、バルト海沿岸地域の奥まで滲透したことについては納得し得よう。いわばこのAの経路は、従来の世界史のとらえ方、オリエント・ギリシャ<sup>(6)</sup>ローマ・西ヨーロッパという経路とまさに符合するのである。事実、飯沼氏の『風土と歴史』においても、『歴史のなかの風土』においても、歴史との関わり合い、農耕社会を問題にするなかでは、この経路だけを取り上げてしまふ。しかもこの経路は、マルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態』に展開される、「アジア的・古典古代的・ゲルマン的」という土地所有形態の展開過程にも対応する。<sup>(6)</sup>

しかし第4図と第6図とを照応させ、しかも、ここで問題にする犁農耕の伝播の時代を見れば、ユーラシアの各地における乾燥指数は、第6図に示された乾燥指数よりは、なお湿潤であったと考えられる。そうとすれば、犁農耕の発生地、さらに第二次中心地から、B経路をとる場合は、より湿潤な北アナトリアからドナウ流域に沿って遡行し、直接森林地帯に入ることになる。またCの経路についてはカフカズ＝黒海北岸を経て中部ヨーロッパ・ドナウ中流域でBと結びつくにしても、第6図に見るかぎり、穀物の種類を問わず——おそらくはキビ・アワなど——夏作可能な穀物を持ち込んだのではなからうか。さらにDの経路については、なお不明な点が多いが、今日の草原地帯が、当時なお林草混交地帯であったとすれば、この間を通じて西北へ伝播し、馬を飼う人びとのなかで、ライムギを中心とする農耕をつくり出したのではないだろうか。犁農耕の発生地あるいは第二次中心地にライムギの名を見かける。しかしこのライムギは、この南方においては、恐らくコムギ類の成育を妨げる雑草的な穀物であったのではないか。雑草のように背丈を伸ばし、より湿潤な地域においては、かえって穀物以外の雑草の成育を妨げ、日照不足にもかかわらず、結果的には「畑の清掃係」<sup>(7)</sup>の役を引き受け、「南方の畑の継子植物」であった。こうしたライムギは北方へ伝播したとき、この風土に適応した穀物として、恐らくは、シベリア・タイガの南縁における唯一の穀物として育成されたのではないだろうか。<sup>(8)</sup>南方から北方への移行の過程で、馬による犁耕と結びついたのであろう。ことに紀元前四千年紀以降は、寒冷化が進むなかで、逆に西南方への伝播となる。この経路こそが、第6図におけるDの経路といえよう。しかもこの経路は、一般にいわれている「縄文土器＝戦斧文化」の北・中部ヨーロッパへの伝播の経路と重なり合うのである。<sup>(9)</sup>

飯沼氏は、たしかにAの経路については、それなりの説明を加えているが、「農業技術からみる」のなかで、とくにヴェルトの図について言及しながら、B・C・Dの経路についての解説さえ十分に見られないのは、どうしたことであろう。もはやコムギ類の品種名と犁、そして牛との組み合わせだけでは、解明し得ない。本稿にとっては、

飯沼氏が触れていない東方からの伝播の経路、B・C・Dの経路、その影響が直接関わる問題なのであった。そうとすれば、こうした農耕、とくに犁農耕の発生と展開は家畜との関わり合いを抜きにしては考えられないであろう。

(1) 松田寿男『アジアの歴史——東西交渉からみた前近代の世界像』NHK市民大学叢書、一九七一年(第四刷、一九七五年)参照。

(2) 飯沼『風土と歴史』三九頁。

(3) 第5図『風土と歴史』四四頁。第6図『同書』四二頁―四三頁。この乾燥指数が、現在のものとすれば、気温の温暖期には中緯度以南でも湿潤度はより高く現われるであろう。

(4) たとえば『カラー世界史百科』平凡社、一九七八年 一四頁参照。

(5) W・アーベル『ドイツ農業発達の三段階』未来社、一九七六年 二七頁。

(6) 飯沼『風土と歴史』ことに「III 歴史のなかのワク——農耕社会の発展——」一一頁以下ではアジア的生産様式を最初に取り上げ、「マルクスの世界史」そして『資本制生産に先行する諸形態』に言及し、「古典古代の世界」「封建社会の成立」から「世界資本主義」にいたる。さらに『歴史のなかの風土』では、より詳細に述べるが、風土と歴史の比重が、次第に後者に移っていく。著書の題名が象徴的に示しているといえよう。

(7) より温暖な西南アジアにおいて、ライムギのいわば原生種はコムギ類の畑にあつて雑草のように早く、しかも丈高に成育し、しかもなお湿潤度の低いこの地帯では、他の雑草をおさえ、日照から遮断して、その成育をとめる。したがって先ずライムギを密植して雑草を除去した畑に、次にコムギ類を植えると、より効果的となる。この意味で「畑の清掃係」といわれるのであろう。

「ヨーロッパでは、きわめて古い時代から穀作に厚播きがおこなわれてきた」のは、この「密植による除草」の効果を生かすためであった。飯沼『風土と歴史』五〇―五一頁。

第5図に示されたように、同じ湿潤地であっても日本を含む東南アジア・東アジアでは、夏の乾燥指数も九・三七―一〇七・二となり、湿潤地に含まれる北ヨーロッパ・シベリアの四・八三―一〇・九三に比べて、けたはずれに高い。

こうした地域では除草は、夏の草取りのように「中耕除草」以外にはあり得ないが、より湿潤度の低い、それだけに雑草の成育度も低い北ヨーロッパのような地域では、たとえば三年にいちど休閑地において、盛夏に二回ほど、湿潤型の犁で土を反転し、雑草を埋め殺す、いわゆる「休閑除草」が可能であった。飯沼、『同書』四七頁。いわゆる三圃制農法を可能にする風土的技術的条件であるといえよう。

(8) 南シベリアの文化は、とくにシベリア青銅器文化として注目され、次第に解明されてきたが、アフアナシエヴォ文化・アンドロノヴォ文化として知られる。たとえば増田精一「第二章 青銅器時代の東西文化交流」『漢とローマ(前出)』所収、九二―九三頁参照。

(9) 『カラー世界史百科(前出)』一四頁。

## 五

飯沼氏は、農業のはじまりを熱帯湿潤地方に見て、ここでは植物の半栽培状態を考え、人間が定住し、排泄物や火を使用した後の灰などによって、食物の残り屑など、いわばゴミ捨場が肥沃な土壌をつくり、植物が森から人間の定住場所におしよせ、犬・豚・鶏など野生の動物も人間の囲わりにおしよせる。ここに植物や動物と「人間との合唱」が成り立つという。<sup>(1)</sup>しかしこうした現象は、何も熱帯湿潤地方に限ったことではないように思う。

膨大な『家畜文化史』を書かれた加茂儀一氏も同じように野生動物と「人間との共生」に触れる。<sup>(2)</sup>最初に中石器時代も早い時期、狩猟時代に家畜化された犬との共生は別としても、野生の山羊や羊など群をなして移動する節食動物の家畜化は、むしろ人間がこの畜群に寄生して移動するなかで進められ、農耕の発生以前において可能であったろう。山羊も羊も乾燥地の高原を好み、西南アジアの高原山麓地帯には、中石器時代も温暖になるころには、この畜群に寄生する移動性の強い牧民が存在していた。さらに湿潤度も増し、林草交雑地帯が現われると、この高原地帯においても農耕がはじまり、ようやく草食の大食動物である牛の馴化も可能となり、定住とともに豚の家畜化

も進む。猪も大食動物であつて、人間の住居の周囲にきて、残食をあさり、排泄物をも處理する。しかし牛も豚も人間の移動生活になじまない動物であり、農耕定住以後の家畜とされる。

たしかにたとえジャルモの遺跡からは、増田精一氏によれば、二種類のコムギ、一種類のオオムギなどのほか、発見動物の約九五パーセントが山羊・羊・豚・牛で、野獸に属するものは五パーセントにすぎない。しかも山羊・羊が全体の八〇パーセントを占め豚は一〇パーセントであつた。<sup>(3)</sup>しかし気温の最高点をすぎて、再び寒冷化が進みはじめると、この西南アジアでは乾燥化が進み、人びとは次第にオアシスに閉じ込められ、犁農耕も不安定になり、山羊や羊の飼育の比重も増し、いわば半農半牧の状態で、再び移動性も増すことにならう。

西南アジアにあつては、はじめて犁農耕を担った人びと自身が移動したかどうかは別としても、犁農耕は、水を求めて、チグリス・ユーフラテスあるいはナイルの大河流域に伝わり、夏の増水・氾濫、冬の減水を利用する冬作コムギを中心とする彎轆犁を使つての農耕文化となり、さらに大河による灌漑農耕に入り、オリエントの古代文明として開花させる。第4図におけるA経路のなから生れる大河流域の農業は、人工灌漑によって乾燥地の天水農業の制約から解放された結果といえる。しかしここでは農業にとつて不可欠なこの灌漑施設を独占する者だけが――共同体であれ、地方政府もしくは中央政府であれ――農業を支配することにもなるのである。<sup>(4)</sup>

同じよ、うに夏の乾燥指数は五以下であつても年指数二〇以上という地中海北岸地方では、オリエントの大河流域とはちがつて、ことに東地中海沿岸および島嶼にあつては、西南アジア高原山麓地方にはじまつた天水による乾地農業が、冬の降水量が多いだけに、その水を求めて伝播したとしても、新石器時代の段階では、最初の乾地農業が直接伝播したにすぎず、それだけではこの地域において、後に開花するエーゲ文明あるいはギリシヤ文明を生み出す条件が整つていないといえないであらう。この時代にあつては、わずかに飯沼氏のいうA経路に沿つて、エンマ―コムギと彎轆犁による犁農耕文化がこの地域を足早やに通り返ぎていったにすぎないのではなからうか。

そうとすれば古典古代の繁栄はこうした乾燥地農業そのものではなく、一方では天水を支配し得たのは、専制政府ではなく、個々に大地を占取する小共同体、個々の共同体成員であった。小共同体は、他方に他の共同体を従属させ、他方で個々の成員のもとに奴隷を集積することによって繁栄の基礎が創られる。<sup>(5)</sup>

しかし同じように西南アジアの高原山麓地方の乾燥化に追われた犁農耕文化も、より湿潤な黒海南岸のアナトリアを経てドナウ流域へと伝播するB経路、あるいはカフカズ山脈の南縁に沿って北上し、さらに黒海北岸からドナウ流域に達するC経路については、どのように考えたらよいのであろうか。

増田氏は、細石器との関連で、牧民の起源に触れ、北方ユーラシアの森林地帯における狩猟起源説と対比させて、この西南アジアにおける山羊・羊の牧畜を農耕起源説として紹介している。<sup>(6)</sup> 加茂氏も指摘するように西南アジアでの山羊・羊の牧畜が農耕に先き立つにしても、ここでは農耕と牧畜はほぼ並行して進んでいったし、この時点では、農耕定住のなかで牛や豚の飼育も可能になったであろう。しかし、その後、この地域での乾燥化が進むなかで、大河流域に水を求めるばあいを除いては、犁農耕は、当時にあつて夏乾燥指数五以上、年指数も二〇以上のより湿潤な北方へと、新しいオアシスを求めて、いわば飛び石伝いのように伝播していくであろう。しかもこの半農半牧の牧民たちは、草原地帯に近づくにつれて、単に節食動物の山羊・羊にかぎらず、犁耕に必要な牛のなかでも放牧に適応し易い牛を選ぶことになろう。こうした牛が、飯沼氏もいうブラキセロス牛であつたのではないだろうか。<sup>(7)</sup>

加茂氏によれば、このブラキセロス牛は、ヨーロッパ最古の家牛でもあり、本来は山地にあつて比較的小型、長額・短角で、移動生活に際して連れていき易い牛とされ、さらにはインド・ヨーロッパ語族と密接な関係にあつたとさえいわれる。<sup>(8)</sup>

たしかに飯沼氏がいうヒトツブコムギと方形犁、そしてこのブラキセロス牛が登場するBの経路は、半農半牧の牧民たちを介して湿潤地へと犁農耕を伝え、ドナウ流域へ達する。しかもカフカズ山脈の南を経て、黒海北岸、ド

ニエブル流域を経て、ドナウ流域に達するCの経路においては、より一層牧民的性格を強めるにしても、キビ・アワなどの栽培を加えて、ドナウ流域さらにボヘミアを含む中部ヨーロッパにまで進んで、Bの経路と合流するとき、この犁農耕文化は、ヒトツブコムギの冬作に、キビ・アワなどの夏作をも加えることになろう。紀元前三千年紀、ボヘミアの新石器時代における農耕民が、ドナウ文化を担う大きな集団に属したとカフカのいうドナウ文化圏は、農業伝播の上から見れば、このB=C経路によって伝えられた犁農耕を基礎とする文化ということになろう。しかもカフカがこのドナウ文化を担う集団に属し、スラブ人の最も古い祖先というかぎりでは、なおスラブ語族を分出する以前の、いわゆる原インド=ヨーロッパ語族を想定せざるを得ないことになろう。

(1) 飯沼『風土と歴史』一五—二〇頁。

(2) 加茂儀一『家畜文化史』法政大学出版社。一九七三年(第三刷、一九七八年)しかし本書の元の版がはじめて世に出たのは一九三七年である。六三頁にわたる総説において、各家畜ごとの各説が展開されている。なお最近遺稿として『騎行・車行の歴史』法政大学出版社、一九八〇年が、『家畜文化史』のうち「家馬」の稿をさらにオリエント、ギリシヤ、ローマ、ヨーロッパ、スキタイなど、日本を含めて——著者にとっては日本が主題ではあるが——それぞれの世界への騎行・車行の伝播の歴史を展開している。人間との共生については『家畜文化史』三三頁以下参照。

(3) 増田精一「第一章 彩文土器の東伝」『漢とローマ』所収 三三—三八三頁。とくに四三頁。七七頁。

(4) 飯沼『風土と歴史』六〇—七五頁。天水による「乾地農業はギャンブル」といわれるように不安定であるが、西南アジア山麓における小灌漑地から、さらに大河流域の灌漑へと展開し、あるいはエジプトのベイスン(溜池)法となつていく。マルクス宛てのエンゲルスの手紙にあるような、アジア的生産様式における土地所有権の欠如も、ここでは人工灌漑が農業の第一条件、さらに水だけが条件となっているからと考えられる。『同書』、一二六頁参照。

(5) 飯沼『風土と歴史』七七頁。一三八—一四五頁。ただここで、直ちに奴隷の導入を問題にするわけにはいかない。人間が他の人間を生産手段の一つとして従属あるいは隷属させる条件は、さらに検討を必要としよう。

(6) 増田「彩文土器の東伝」七一—七四頁。

(7) 飯沼『風土と歴史』三二—三三頁。本稿第3図参照。

(8) 加茂『家畜文化史』五八一—五八三頁。五八六頁。

## 六

第4図を作成した鈴木氏は、この農耕の拡大をインド・ヨーロッパ語族の形成と関連づけ、プラスCの西をイタリア語派、マイナス6Cまでをゲルマン語派、この線から東をスラブ語派とみているが、結果的にみて、たとえそれに近い分布をみたとしても、それだけでは短絡的で数千年にわたる歴史を無視するものといえよう。しかし広範囲にわたるインド・ヨーロッパ語族の拡汎の原因を「牧畜民」の移動と交渉のなかでの言語の共通性に見出し、併せて、とくに三五〇〇年前、紀元前一五〇〇年ごろの気候の激変、八千年前から五千年前のいわゆるヒブシサーマル期という高温期も終つて、再び寒冷化し、西南アジアでの乾燥化が進む時期にインド・ヨーロッパ語族の形成と移動を対応させている点は卓見であろう。ユーラシア大陸におけるこの紀元前三千年紀と紀元前二千紀は、世界史の最初の転換期であつた。

先にも触れたように、増田氏も牧民の起源に触れているが、その主題は、東西交渉史における彩文土器の東伝にあつた。<sup>(3)</sup>オリエントの山麓地帯にムギ栽培と羊を中心とする牧畜がはじまると、ほぼこれと並行して彩文土器の盛行も見られる。たとえばイラン高原のテペ・シアルク遺跡では、この彩文土器の文様が幾何文様から形象文様へ、そして動物文へと変化していく。最初はこれに随伴して幾何形細石器が出土するが、紀元前五〇〇〇年から三五〇〇年にかけて、姿を消してしまう。増田氏は、これは初期農耕に残っていた狩猟から農業と牧畜による生産経済へと飛躍した象徴の一つと考えている。しかもこのころ、アナトリア高原・ザグロス山中では早くも銅製品が現われ、それは、メソポタミアの大河流域への進出のころでもあつた。

この幾何形細石器の消滅から考えると、ことにユーラシア北部の森林地帯や中央アジアの草原地帯で狩猟民から牧民が発生した時期も、南辺の農耕地帯で牧民が発生した時期も、多少のずれがあるとしても、ほぼひとしい、と増田氏はみている。この牧民は、後世の遊牧騎馬民族のような純遊牧民ではなく、北方の狩猟民からは牧主狩猟副、農耕民からは牧主農副とされる。こうした牧民たちによつて彩文土器・銅器とともに農耕も伝えられたのであろう。紀元前三千年紀に入ると、エニセイ川上流地域の河川・湖沼の周辺に、牧主農副でも農耕に重点をおいたアフアナシエヴォ文化がみられる。ここでは羊・牛・馬の牧畜が行われ、多少とも冶金技術が芽萌えているが、この南シベリアに紀元前二千年紀になると、いわゆるシベリア青銅器文化の花が開くのである。アンドロノヴォ文化は、牧畜と農業をかね、青銅の冶金技術も進み、刀子・短剣・鬩斧・鎌などが出土するが、その居住地は河岸から離れた地点に拡大し、さらに覆い付きの四輪車で知られるカラスク文化になると、居住地も河岸からかなり遠く隔つたところまで拡がり、青銅器も鍛造よりむしろ鑄造が盛んで、精緻な動物像などを蠟型によつて鑄造するまでになり、短剣も柄と刃が同時に製作される北方型、後のアキナクス型短剣に近づく<sup>(4)</sup>。この三つの文化は、墳墓、いわゆるクルガン文化でカラスク文化へ進む過程で居住地も広範な地域に拡がり、次第に移動性の強い牧畜の比重が増えていったと増田氏は指摘する。

増田氏は、この南シベリアにおける農耕の内容については、ムギ類というだけである。しかし犁農耕の発生地から、おそらく高温なヒブシサーマル期の中に、半牧半農の牧民たちによつて中央アジアの、おそらく今日の中・ソ国境山麓地帯を飛び石伝いに北上し、アルタイ山脈からサヤン山脈の山麓、エニセイ川の上流域にまで到達したのであろう。コムギ類のほかにオオムギ、そしてライムギも雑草的な穀物として北上し、その後寒冷化が進むなかで、ライムギは重要な栽培穀物に昇格したのであろう。飯沼氏による第4図のD経路の出発点と結びつくといえよう。

D経路にとつてもう一つの要因は馬の出現である。加茂氏によれば<sup>(5)</sup>、野生馬はユーラシア大陸の北方高原、アル

プス以北のヨーロッパにも広く分布し、古くから狩猟の対象とされてはいたが、その家畜化は、犬・山羊・羊・牛・豚などよりかなりおくれ、紀元前二八〇〇年ころのトリポリエ文化の遺跡から最も古い家畜馬の骨が発掘され、紀元前二七〇〇年ないし紀元前二一〇〇年ごろ、黒海北岸とドナウ流域の草原ではじまったとされる。加茂氏は、この住民を原インド・ヨーロッパ語族としているが、家畜化された馬は、恐らく駄用あるいは乗用に使われたのであろう。しかし裸馬に騎することはできても、馬具が発達していない段階では、十分に騎りこなすことはできなかった。南シベリアの狩猟民たちは、早くから馴鹿を馴化し、一頭の馴鹿の両側にそれぞれ一本の轅、複轅の肩櫛が使われ、アフアナシェヴォあるいはアンドロノヴォ文化では、馴鹿に代って馬が使われ、この複轅の肩櫛から一頭立ての馬車が生れる。加茂氏はこの肩櫛については述べていないが、この肩櫛から、ライムギの栽培と結びつく、馬のひく対犁も生れるように、私には思われる。またこの肩櫛をひく馬に騎乗して、馬を統御することから、単に乗用だけの騎馬が発生し、これに鞍をおくが、なお轡を知らない騎馬人を生み出すことにもなる。紀元前二二〇〇年ごろにはドナウ流域にあり、その後中部ヨーロッパにまで拡がるというのである。

一般に、車の起源は、メソポタミアで紀元前三五〇〇年ごろとされる。当然馬の家畜化より早く、すでに家畜化されている牛がひいた。加茂氏によれば、一本の轅の両側に一頭づつ、二頭立てで、二頭の牛は軛を肩で押すようにして車をひいたのである。その後、メソポタミアにあつて野生種としてあつたオナーゲル（半驢）を馴化して、紀元前二二〇〇年ごろには、牛に代つて車をひかせ、車の速度は増大したが、牽引力は低下する。しかし戦車としての効用は大きくなる。それにもかかわらず、牽引法は牛のばあいと同じ、単轅、二頭立てであり、さらに両側に一頭づつ、いわば先き引きを加えて、単轅四頭立ての車、とくに戦車を生み出すに至った。これが、中央アジアの草原にあつて、なお轡を知るまでには達していない馬飼いの騎馬人が、おそらくはアナトリアに移動・進出したときに知られるにいたつて、この単轅・二頭立てであるいは四頭立ての戦車に、はじめて馬が用いられるにいたつた。

このことに最初に成功したのが、インド・ヨーロッパ語族に属し、最初に鉄器を使ったというヒッタイトであったと加茂氏はいうのである。<sup>(6)</sup>

さらに加茂氏は、ドナウ流域から中部ヨーロッパにまで拡がった騎馬人たちの間に、紀元前二千年紀になると、オリエント起源の単輻の戦車が、これに伴って東方からおしよせてきた新しい青銅器文化とともに、ひろまった。この馬のひく戦車の牽引力を増すために轡が発明されたというのである。この戦車はしかし黒海北岸を経由したものでなかつた。<sup>(7)</sup>

(1) 鈴木・山本『気候と文明・気候と歴史』二〇頁。

(2) 『同書』三、五〇〇年前」四九―六四頁参照。

(3) 増田「彩文土器」三三頁以下、とくに六八頁以下「第三節 牧民の細石器」参照。とくに七八頁参照。

(4) 細石器における幾何形から動物文への移行、そしてさらに青銅器による精緻な動物文様、動物像そしてとくにアキナクス型短剣は最初の騎馬民族としてのスキタイ文化の最も基本的な特徴となる。

(5) 加茂『家畜文化史』八頁。「馬が四万五〇〇〇年前に家畜化されている」は誤りで、恐らく「四―五〇〇〇年前に」との誤植であらう。なお三九頁。二三―四頁。

(6) 加茂『騎行・車行の歴史』二二頁―三三頁。とくに二六頁。

(7) 『同書』、四八―四九頁。ギリシヤにおける戦車は、東ヨーロッパのドナウ流域の騎馬人の進入によってではなく、それより先、オリエント・エジプト・クレタを経て紀元前二千年紀中葉にはミケネに入ったものと考えられる。北方ドナウ流域・マケドニアから入ったとすれば、もっと早い時代にギリシヤ本土において出現していたはずであると、加茂氏はいうのである。

インド・ヨーロッパ語族の原郷問題を最初に提起したのは、いわゆる比較言語学であった。角田文衛氏は最近のこの問題をめぐる研究成果を紹介している。<sup>(1)</sup>

共通基語から帰結するところでは、原郷は「海に面せず、雪が降り、狼が棲んで」山はないが、低い森林があるような地域。生業は牧畜と農耕で、犬・牛・羊・山羊・馬・豚などが飼育され、犁耕が行われ、銅・銀・金を知り、その村落は防壘をめぐらしたか、あるいは「逃げ城」をもっていた。宗教的権威をもつ王を頂点にする部族国家で、神官・武士・庶民からなる階級社会で、その基礎には家父長制大家族があった。<sup>(2)</sup> こうした原郷から紀元前二千年紀には、東はインド・アリアからペルシア・ギリシャ・ローマ、さらに西方ではケルト・ゲルマン・スラブなどの諸語族が拡散したのは、最近の歴史学の成果によっても事実と考えられよう。

こうしたインド・ヨーロッパ語族を大きく二つに分類し「百」を表わす数詞をとって、サテム語群（ペルシア地方のAVEスタ語の *satem*）とケントウム語群（ラテン語の *centum*）とに分け、前者を東方系、後者を西方系としていたのである。しかし最近の研究で中央アジアのトカラ語、小アジアのヒツタイト語が西方系のケントウム語群に属していることが判明してから、簡単に東・西とはいえなくなってしまった。たしかにスラブ語も、古代教会スラブ語で *stō*、現代ロシア語で *сто*、チェコ語でも *sto* で、ヨーロッパにあっても、東方系サテム語群に入る。ただこの分類について、角田氏は「共通祖語の軟口蓋音、つまり舌背子音（*K・C・ch* のような）を保持している諸語と、これらを歯擦音（*S・sh* など）に変えた諸語との対立」と説明する。<sup>(3)</sup> 素人なりに考えるとケントウム語群のなかからサテム語群へと変っていく諸語が生れたと見てよいのであろうか。

こうした原郷を、大部分の言語学者は、東はウラル山脈、南はカルパート山脈とカフカズにはさまれた黒海沿岸とみているが、この原郷問題を考古学的に解明しようとする最近の成果として、角田氏は、スチュアート・ピゴツ

ト、そしてとくにマリアーギンブタスのクルガン文化による解明を紹介している。<sup>(4)</sup>

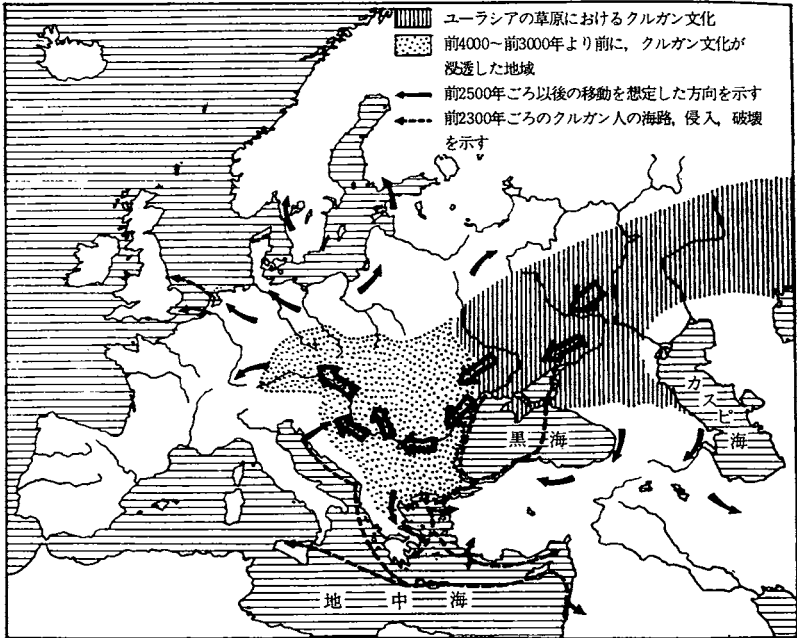
最近までの考古学の成果は、ギリシヤ本土・ヒッタイト・シリア<sup>(5)</sup>ミタンニ、あるいはインドへのインド<sup>(4)</sup>ヨーロッパ諸語族の拡散・移動についてはかなり歴史的に解明されている。しかしヨーロッパにおけるケルト・ゲルマン・イタリック・スラブなどの諸語族について、それが、いつ、どこから移動していったかは、それほど明らかではない。

インド<sup>(4)</sup>ヨーロッパ諸族の原郷を想定するとすれば、既知のインド<sup>(4)</sup>ヨーロッパ諸語族が移動する直前の時期、およそ紀元前三千年紀を考えねばならないであろう。この点を考慮して、ピゴットはドニエプル下流域のミハイロフカ遺跡を取り上げて、紀元前三千年紀中葉の南ロシアにおける銅器時代の農耕民の文化を考える。穀草を栽培し、牛・馬・羊・山羊を飼い、村落を形成し、単葬墳をもつ、広い意味でのクルガン文化の一環であった。この一連のクルガン文化、紀元前五〇〇〇年以降を精査することから、このインド<sup>(4)</sup>ヨーロッパ諸族の問題を解明しようとしたのがギンブタスであった。

ギンブタスは、このクルガン文化を四期に編年し、第一期は紀元前五千年紀後半のドニエプル<sup>(4)</sup>ヴォルガ草原(當時はなお林草交雑地帯)の新石器文化。第二期は紀元前四千年紀前半のドニエプル<sup>(4)</sup>ドニエツツ文化で、ドナウ流域に沿って西進し、ハンガリー東北部まで進出し、第三期は紀元前四千年紀後半で、このクルガン文化はマケドニアをふくめたバルカンから中部ヨーロッパまで侵透しはじめていた。なお角田氏は、南シベリアのアフォナシエヴォ文化は、この第三期のクルガン文化の伝播とみている。第8図に示したように第四期は、紀元前三千年紀に、ヨーロッパ北部ばかりでなく、ギリシヤ本土・アナトリア・シリアさらにエジプトまで及んだとされる。

このギンブタスによれば、クルガン第一期、第二期、総じて野生の獣類の骨は一〇ないし二五パーセント、淡水魚の骨・銛・釣針から河川や湖沼での漁撈も行われている。農耕も副業的に行われ、銅は指輪・釧・ペンダントな

第 8 図



前 4 千～前 3 千年紀におけるクルガン文化と最高潮に達したその拡汎

角田「インド・ヨーロッパ人の起源と拡汎」73頁図

なお「同論文」71頁図における拡汎の方向を $\leftarrow$ で挿入した。

ど服飾品に使われている。この時期のドニエプル河畔にある集落跡、デレイファ遺跡にあつては、約三〇〇〇平方メートルの広さに、半地下式の二軒の家屋跡（六×一三メートル）が発掘されている。ただ「馬の遺骨は家畜の骨全部の七四パーセントを占め」、牛は二一パーセント、ついで豚と羊という。「一二つ孔が穿たれた鹿の顱骨の破片を多数出土しているが、おそらくそれらは馬鞍に使われたものであろう」と角田氏は紹介し、ことに「クルガン第二期と同時期の文化で、これほど馬を飼育し、かつさまざまな馬具が発達した文化は、ほかに知られていない」とする。また車両についても、クルガン第二期の一古墳から二輪車の木造部が残つたとされ、おそくとも紀元前四千年紀のなかごろまでに車両が使用さ

れたことは確かであろう、とされている。<sup>(6)</sup>

比較言語学のいわば理論的要請からはじめられた原郷問題をクルガン文化の全領域、中石器時代にまで遡る必要はなく、むしろピゴットもいうように、移動直前に焦点を合わせればよいのかもしれない。しかし、原インド・ヨーロッパ語を普通に語る語族があつたとするならば、その語族から各地に拡散・移動していく時期は同じではない。ギンブタスのようにクルガン文化を歴史的に追わねばなるまい。それにしてもクルガン第二期、紀元前四千年紀前半の馬と車の問題は、先に触れた加茂氏の記述とは少くとも一千年は、かけ離れている。同じことは銅器についてもいえよう。

馬の家畜化・飼育の時期、銅器使用の程度を別とすれば、中石器から新石器時代にかけて、この地域が、狩猟・漁撈を残しながら、一方に犁農耕を、他方に羊・山羊を中心とする牧畜を営む、半牧半農の牧民が生活していた林草交雑地帯であつたことにちがいはない。ピゴットのいう原郷における文化は、ギンブタスのいうクルガン第四期となり原郷と想定される黒海北岸では馬を飼ひ銅器を使うまでになつた。このクルガン文化は、この時点紀元前三千年紀に入つてドナウ流域から中部ヨーロッパ、さらにその周辺にまで滲透し、王や戦士が拠る堅固な城塞を持ち、先行文化を破壊し劫略し、移住と定住による新しい文化を誕生させ、移住先の先住民との接触・混血等を通して、おそらくオリエントをも含めて、ことにギリシヤ・ローマあるいはケルト・ゲルマン・スラブなどのインド・ヨーロッパ諸語族が形成されると考えられる。

第8図において、紀元前四千年紀に滲透した地域のクルガン文化は、たとえそれが原インド・ヨーロッパ語族によつて担われていたとしても、加茂氏によれば、なお家畜としての馬を知らない。最初の馬の家畜化した地域を黒海北岸とドナウ流域の草原としても、その時期は紀元前三千年紀に入つてからであり、このクルガン文化の担い手は、半農半牧の牧民であつた。こうした牧民は、一般に農耕の可能な条件の下では、より安定的な農耕を志向する

といえよう。カフカの指摘のように、ボヘミアのがわからなくても、紀元前三千年紀のドナウ文化圏はなお新石器時代にあり、銅器はもちろん家畜としての馬も知らなかった。この後半、ボヘミアからみて東南ヨーロッパがもっとも先進的な文化をもつにいたるのは、ギンブタスのいう、黒海北岸において第四期に入ったクルガン文化の新しい進出によると考えられ、その影響もようやくモラヴィアにまで達するといえることになろう。

(1) 角田文衛「インド・ヨーロッパ人の起源と拡汎 ユーラシア世界の転換」『征服と遠征 古代文明の謎と発見』10  
毎日新聞社、一九七八年。所収 三三—一九〇頁。

(2) 「同論文」四七一—五一頁。

(3) 「同論文」四三—四四頁。

(4) 「同論文」ピゴットについては五八頁以下参照。ピゴットの名著『Ancient Europe from the Beginnings of Agriculture to Classical Antiquity, Edinburgh』が刊行をみたのは、一九六五年のことであったとされる。ギンブタスについては、六九頁以下。ギンブタスの統一の見解は一九六六年に「原インド・ヨーロッパ文化——前五、四、三千年紀におけるクルガン文化」に代表されるが、一九七四年にも「原インド・ヨーロッパ人に関する一考古学者の見解」を公にしている。ちなみにボヘミアについてのカフカの『チェコスロヴァキア小史』刊行以後の研究であることを考えねばならない。

(5) たとえば、岸本通夫「沈黙のヒツタイト——鉄器時代のさきがけ——」『民族の光と影 古代文明の謎と発見』9  
毎日新聞社、一九七八年。所収。三一—八四頁。太田秀通『東地中海世界——古代におけるオリエントとギリシア——』  
世界歴史叢書 岩波書店、一九七七年 等々参照。

(6) 角田「前掲論文」七六一—七七頁。しかし、「馬の遺骨」「七四パーセント」という意味は、どのように評価するか、かなり疑問をもたざるを得ない。家畜ではあっても食料のためとならば、この数値は考えられ得ない数値ではないであろう。

このような、いわゆる原インド・ヨーロッパ語族の拡汎、とくに西進によって、ボヘミア地方にはどのような状況が生まれてきたのであろう。紀元前二千年紀のボヘミアへ目を向けてみよう。

カフカによれば、<sup>(1)</sup>ボヘミアにあっては、金属なかでも銅を知るのは、およそ紀元前二〇〇〇年ころとされるが、なおボヘミア自体にある鉱床は知られていなかった。したがって銅や銅器は輸入に依存し、それによって他の地方との交易が活発となり、住民の移動も一層進んだとされる。ついでカフカは(2)家畜飼育 *cattle-breeding* の重要性が増し、男子の労働が前面に出て、家父長制 *patrilarchy* への道が準備された。そしてこの時期に氏族の成員間における所有の不平等がはじまり、個々人によって取得された畜群が、彼らの財産とみなされるようになったという。(3)考古学的な出土品は、明らかに所有を基礎としての社会的階層分化 *social differentiation* を示している。いくつかの墳墓は貧弱で素朴であるが、他方には立派に飾られたものもあった。この点からカフカは(4)ここには二種類の居住様式があつて、より豊かな人びとは丘の上に住み、より貧しい人びとは、平地や川の流域に住んでいた。このことは異った氏族や部族、相互間に戦争が起つた最初の時期であり、最初の侵入者が古くに定住した人びとを従属させようと試みた時期でもあつたという。(5)およそ紀元前一四〇〇年〜一〇〇〇年ごろ、エルツ山脈(クルシネー・ホリ)において、豊かな錫鉱床が発見されると、ボヘミアの青銅器時代は、ヨーロッパにおける最も進んだ地方の一つになったが、銅はなおエーゲ海地方から、さらに間接的にはエジプトや中央アジアから輸入されていた。(6)青銅器は大規模に生産され、そのすぐれた質によって、農業と手工業を刺激した。いろいろな氏族や部族の技術水準の平準化が進み、個々に異っていた生活様式も急速に統合されていったのである。

このようにボヘミアにおける青銅器時代を一般的に説明した後、カフカはより具体的な文化とその担い手たちに触れる。

青銅器時代のボヘミア地方には異つた三つの人種グループがあつた。(1)プラハの北郊の部族長の墳墓から沢山の青銅器などが発見されたウーニエティツェ *Únětice* の名をとつたウーニエティツェ (アウンイエティツ) 文化とその担い手たち、高塚墳文化の担い手 *Hügelgrabvolk* としてラウジツツ文化の担い手たちである。青銅器時代前期のウーニエティツェ文化は、かなり広汎に中部・東ドイツにも拡がっていた。カフカによれば(2)ラウジツツ文化人は、ウルネンフェルダー (火葬骨壺文化人) *Volk der Urnefelder* とも呼ばれ、青銅器中期にはボヘミアでは東北部地域に住み、ドニエプル・ウイスラ両河の広大な地域から移動してきた人びとで、紀元前一千年紀鉄器時代に入ると、原スラヴ人のなかに包含されるが、かれらはもっぱら農耕を営み、古い新石器時代の農耕文明と結びついている。これに対し(3)南ドイツからボヘミア・モラヴィア南部に入つて来た高塚墳文化人たちは主として放牧 *Weidewirtschaft, cattle-grazing* に従事し、後に歴史的にはケルト人あるいはゴール人になつたとされる。

ボヘミアのこうした状況を考えるとすれば、ギンブタスがクルガン文化の編年のなかでとらえた四つの時期のどの時代の文化が何時ごろ西進したと考えたらよいのであろう。

第8図に見られるギンブタスによるクルガン文化の西漸が、飯沼氏の農業伝播のC経路(第4図)に重なるが、この時代は、すでにボヘミアの新石器時代の農耕においてキビを知つてゐることからすれば、少くとも紀元前三千年紀前半より後れることはないように思う。比較言語学から言語学的に想定された原インド・ヨーロッパ語族の原郷が、広い意味における黒海北岸地域であるとしても、それは何時ごろの時代であらうか。ピゴットが紀元前三千年紀、それも中葉と見れば、黒海北岸にあつたギンブタスの第四期クルガン文化人となり、この時代であれば、加茂氏が、この地域での馬の家畜化を想定する時代とも対応しよう。そうとすれば、紀元前三〇〇〇年ごろまでにドナウ流域から中部ヨーロッパにまで拡汎していたいわば第三期クルガン文化人は、農耕や牧畜を知つてはいても、なお馬飼いの牧民ではなかつた。しかし彼らが、黒海北岸からドナウ流域の草原地帯にあつたところは、なお移動性

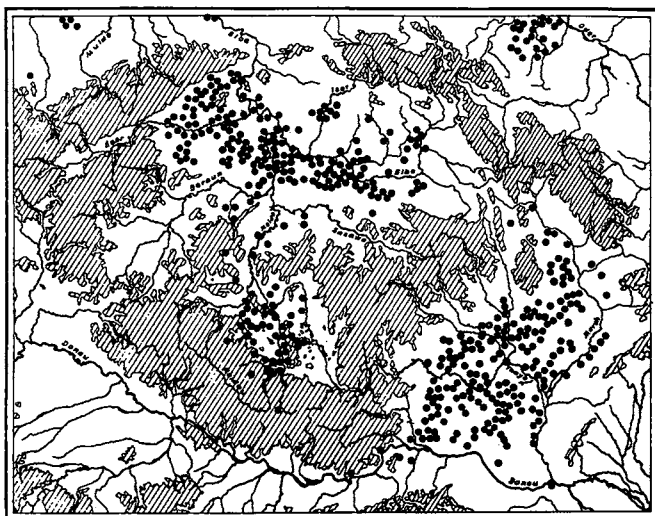
も強い牧主農副の羊飼ひ牧民であつたろうが、西漸してより湿润な森林地帯に移動するにつれて、河川・湖沼の水辺にいわゆる湖上村落＝杭上村落 Pfahlbauten により一層農業の比重を増していくであろう。この農業は、第4図におけるC経路に沿うにしても、B経路、方形型とヒトツブコムギの犁農耕の上に重なることにならう。

こうした半農半牧の農耕民が、なお黒海北岸からドナウ流域にあつた、ギンブタスのいう第4期クルガン文化人がこの紀元前三千年紀に中部ヨーロッパにまで進出するにつれ、さらにヨーロッパ北部ばかりでなく、ギリシヤ本土・アナトリア・シリアさらにエジプトにまで進出するにいたつたと考えられる。今も触れたように、彼らは馬飼ひの牧民ではなく、まして、本来の意味での騎馬人でもなかつた。さらに、もしケントウム語族群からサテム語族群に分かれて変化する、別の言い方をすれば、東方からの新しいインド＝ヨーロッパ語族、おそらくはイラン系サテム語族群が進出したとすれば、ここにあつた人びとは、ケントウム語族群に入り、事実たとえばギリシヤ人、ゲルマン人、ケルト人あるいは古代イタリア人、時期は後れるがローマ人などが、これに属することにならう。

ボヘミアにおける新石器時代、紀元前三千年紀後半、カフカが東南ヨーロッパからの影響を受けたという文化の担い手は、黒海北岸からドナウ流域にあつた、ギンブタスのいう第4期クルガン文化人であり、紀元前二千年紀前半には、ボヘミアを中心に、ウーニエティツエ（アウンイェティツ）文化を北ヨーロッパにまで展開したといえる。第9図に見られるようにラベ（エルベ）＝ウルタヴァ（モルダウ）そしてモラヴァ（マルヒ）などボヘミア＝モラヴァの主要河川流域に広く普及していた。<sup>(2)</sup>

カフカは、ボヘミア＝モラヴァの青銅器時代に異つた三つの人種的グループに担われた文化として、このウーニエティツ文化と、高塚墳文化とラウジツツ文化をいわば並記しているが、先にも述べたように、後の二者は紀元前二千年紀後半にはじまり、鉄器時代に移行する紀元前一千年紀に入つて、高塚墳文化の担い手たちは、南ドイツから入つてケルト人に、ラウジツツ文化の担い手たちは、カルパチア山脈の北、ドニエプル＝ウイスラ両河地域か

第 9 図



Karte 3:  
 Verbreitung der Aunjetitzer Kultur (nach L. HAJEK, H.-E. MANDERA und  
 K. TIHELKA) Mildenerger, "Handbuch. I" S. 64.

ら入って、原スラヴ人に包含されたという。ポヘミア地方では、ここではじめて世界史に登場する歴史的な民族名が、考古学的研究によって明らかにされた文化と結びつけられている。しかも先に述べた鈴木氏によれば、紀元前一五〇〇年前後は地球上気候の激変期であった。<sup>(3)</sup>この文化の相互関連が、やはり大きな問題であろう。

(1) F. Kavka, "Outline," pp. 9—11; do., "Abriess,"  
 SS. 10—11.

(2) G. Mildenerger, a. a. O., SS. 61—63 bes., S.  
 64 Karte 3.

(3) 鈴木、「前掲論文」、四七—六四頁。

九

鈴木氏は先に触れた「気候と文明」のながで、第4図に示したようにインド・ヨーロッパ語族の形成を取り上げているが、むしろその主題は気候の変動のなかで、「古代文明の発祥と終息」というグローバルな立論にあった。<sup>(1)</sup>ヒブシサーマル高温期にはじまった西南アジアにおける最初の農耕文化は、乾燥化のはじまる紀元前三〇〇〇年

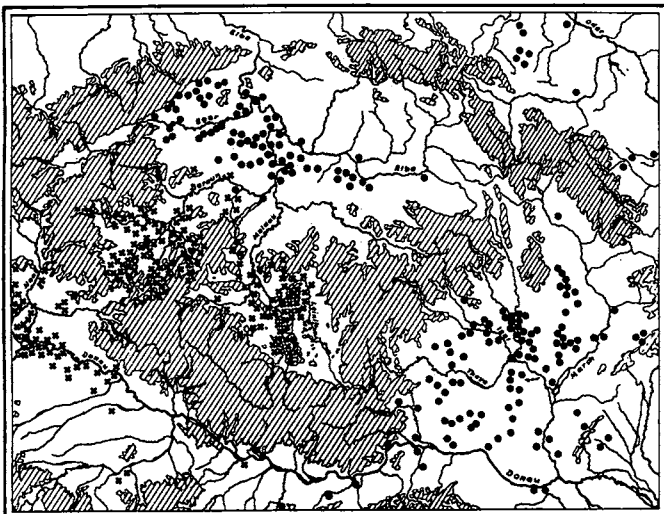
ころ人工灌溉を基礎に「古代文明」を展開させるが、紀元前一五〇〇年、三五〇〇年前、地球規模での気候の激変があり、これによってこの「古代文明」は没落する。この契機となったのが、紀元前二千年紀に南下したヒッタイトであり、これに関連したといわれるヒクソスのエジプト進入であり、さらにギリシア人あるいはインド・アーリア人であったという。初期の古代オリエント世界は、紀元前一五〇〇年以降、再編されることになる。

北ヨーロッパにあっても、この気候の激変、寒冷化によって温暖期に北上した巨石文化を担った農耕民——飯沼氏のA経路——の一部は漸く南下をはじめ、インド・ヨーロッパ語族の北上に対して、いわば逆流現象がはじまる。<sup>(2)</sup> おそらくポヘミアにおけるウーニエティツェ文化に先行して定住していたインド・ヨーロッパ語族、半農半牧の農耕民は、ギンブタスによれば第8図のように紀元前三千年紀に拡汎した一部であろうが、中部ドイツの北部では中石器時代以来の巨石文化人とおそらく新石器時代後期の鐘形杯文化人とも重層的に混淆し、ウーニエティツェ文化の強い影響を受けながらも、独自の北方青銅器文化をつくり上げる。フィシャー・フアビアンによれば、両者の融合化は紀元前一四〇〇年ころには完了し、ここにゲルマン人が成立したといわれる。<sup>(3)</sup>

これに対してケルト人の形成のばあいはどうであろう。ゲルハルト・ヘルムは「ペーメンはケルト人の祖先の原故郷か？」と問いかけている。<sup>(4)</sup> ゲルマン人形成のばあいとちがって、第8図において紀元前三千年紀に西方へ拡汎した人びとは、飯沼氏のA経路に沿って西ヨーロッパを北上した巨石文化に続いて、新石器時代も後期に北上してきた鐘形杯文化人に妨げられて今日のフランスには入れなかった。こうした人びとは、おそらく、鐘形杯文化と接触しながら、ウーニエティツェ文化圏のなかにあつてスイスから南ドイツに停滞していたことになろう。ヘルムは、紀元前一五〇〇年より前の世界に原ケルト人を捜そうとするのは性急にすぎよう。ペーメンとラウジッツ地方では、まだ分散過程が十分には進んではいなかったといふのである。<sup>(5)</sup>

たしかにこの地方は、当時のヨーロッパ史の中心点であり、諸文化の交流地であつたに相違ないが、なお依然と

第10図



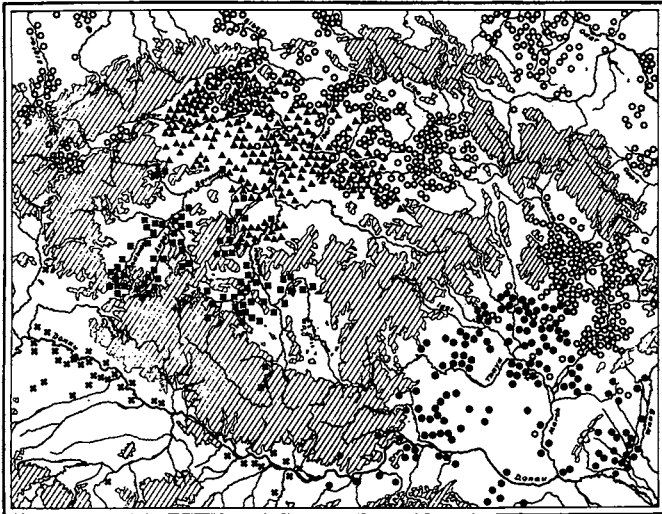
Karte 4:  
 Verbreitung der Hügelgräberkultur (nach A. BENES, F. HOLSTE, H. PREIDEL  
 und W. TORBRUGGE)

- mitteldanubische Gruppe
  - × oberpfälzisch-südwestböhmisches Gruppe.
- Mildenberger, "Handbuch. I" S. 65

してクルガン、高塚墳を文化の特徴としていた。しかし紀元前一三〇〇年頃になるとラウジッツ文化とウーニエティツェ文化の担い手たちは、ようやく死者を焼いてその灰を骨壺に納め、共同の墓地に埋める、いわゆるウルネンフェルター（火葬骨壺）文化に移行していく、とヘルムも述べている。この火葬墓文化は、ここからヨーロッパ大陸の各地に拡汎し、アナトリアからギリシヤ、さらにパレスティナ沿岸地方にまで逆流しているのである。ただ北方のゲルマン文化圏では、「移動して来たウルネンフェルト人を撃退したものと思われる」ともいわれる。<sup>(7)</sup>

たしかにヘルムもいうようにウーニエティツェ文化の特徴は一般に広い意味でクルガン、高塚墳であり、その末期にラウジッツ文化とともに火葬墓に移行したとしても、カフカのいうように、ボヘミア・モラヴィア南部にはいわゆる高塚墳文化Hügelgräberkulturが残存している。第10図に示されるように、ミルデンベルガーによればボヘミア北部とモラヴィアにある中部ドナウグループと南ボヘミアに集中するグループとかなり明確に別れている。しかも後者は前者に比して山間高地に分布しているの

第11図



Karte 5:  
Verbreitung der Urnenfelderkultur (nach J. BOUZEK, J. FILIP, J. RHOVSKY,  
H. PREIDEL, E. PLESL u. a.)

- Velaticec Gruppe                      ■ Milavečec Gruppe
- Lausitzer Gruppe                    × süddeutsche Gruppe.
- ▲ Knovizec Gruppe

Mildenberger, "Handbuch. I" S. 70.

(8) ある。そうとすれば前者がギンブタスのいうクルガン文化の西進北上のルートに沿うものといえるが、後者はむしろそれに先行してスイス・南ドイツの山間高地に拡散した半農半牧の牧民たちが、ヘルムのいうように鐘形杯文化人に妨げられ、むしろ逆流してきたとは考えられないだろうか。カフカのいうように、山間高地にあって農耕よりはむしろ放牧 *Weidewirtschaft, cattle-grazing* に従事し、牧民的性格を再び強めることにならう。鉄器時代に入って次第に歴史的存在としてのケルト人に形成されていくのである。

ヘルムは、ウーニエティツェ文化とラウジツツ文化を一括してポヘミアにおけるヨーロッパ先史のなかで最も豊かな文化とするが、両者が紀元前一五〇〇年以降火葬墓に移行するなかで「破局的なできごととの圧力で」とその理由を述べている。(9)これが鈴木氏のいうように究極的には当時の気候の激変、急速な寒冷化にその理由があるにしても問題は残ろう。カフカはラウジツツ文化は年代の差はあるにしても、ポヘミアにあつては、ウルネンフェルター文化と同じ担い手と考え、後の原スラヴ人と関係

づけている。

ミルデンベルガーは、しかし第11図のように、ラウジッツ文化は広い意味でのウルネンフェルター文化の一グループとして位置づけている。<sup>(10)</sup> それにもかかわらず、第10図における中部ドナウグループの高塚墳分布に重なってウエラテイツアーグループ(モラヴィア)とクノヴィザーグループ(北部ボヘミア)が分布し、この分布と重層的に、オーデル上流域など北方からラウジッツグループが拡汎している。ボヘミア南部、第10図では上フアルツ・西南ボヘミアグループの高塚墳の分布に対してはミラヴェチアーグループが重なっている。この南ボヘミアでは、カフカのいう二重の定住様式、逆流してきた高塚墳文化人による先住の定住農耕民の支配、この農耕民がミラヴェチアーグループとして火葬墓を持つにいたったと考えることはできよう。しかし問題はやはりラウジッツ文化の扱い方である。

カフカもその一人に数えられるが、このラウジッツ文化圏をスラヴ人の原郷と結びつける考え方は、とくにスラヴ人の起源を取り上げるなかで問題とされる。<sup>(11)</sup> この問題は、すでに与えられた紙数も越えたので、原スラヴ人から西スラヴ民族としてチェコ民族のいわば歴史的経験を追うなかで、チェコ民族の形成を取り上げる別稿に譲り、本稿ではいくつかの問題点を上げ、結びに代えようと思う。

(1) 鈴木「前掲論文」とくに「4 古代文明の発祥と終息」二五―三三頁。紀元前一五〇〇年ごろの気候の激変については「6 三五〇〇年前」四九―六四頁参照。鈴木氏の結論は「七 ふたたび古代文明の終焉について」六五―六八頁に述べられている。

(2) 「同論文」六六頁参照。

(3) S・フィッシャー・ファビアン、片岡哲史訳『原始ゲルマン人の秘密』佑学社、一九七七年(第二刷 一九八〇年)とくに八五頁。なお原題は S. Fischer-Fabian, "Die ersten Deutschen. Der Bericht über das rätselhafte Volk

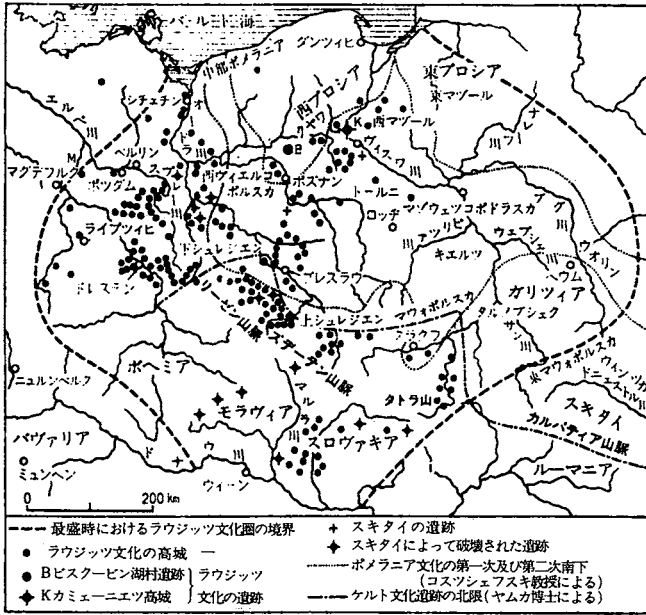
der Germanen." Locarno. 1975.

- (4) ゲルハルト・ヘルム、関楠生訳『ケルト人』河出書房新社、一九七九年 一四一頁。なお原著は Gerhard Herm, "Die Kelten." Econ Verlag. 1975.
- (5) ヘルム『同書』一四四頁。
- (6) 『カラー世界史百科』一八頁参照。
- (7) 椽川一朗「第一章 ドイツ国家の形成」林健太郎編『ドイツ史、世界各国史 3』山川出版社、昭和三二年（第一版第三四刷昭和五〇年）一五頁。
- (8) G. Mildenberger, a. a. O., S. 65 Karte 4 & SS. 67—69.
- (9) ヘルム『前掲書』一四三頁。
- (10) G. Mildenberger, a. a. O., S. 69 & SS. 69—78.
- (11) たとえば、国本哲男『ロシア国家の起源』ミネルヴァ書房、一九七六年、「第二章 スラヴ人の起源」四七—八二頁。鳥山成人『スラヴの発展 大世界史15』文芸春秋社、一九六八年「3 スラヴの起源と移動」二七—四二頁。同『ピザンツと東欧世界 世界の歴史19』講談社、一九七八年「3—1 スラヴ族の起源をめぐって」七〇—七五頁。

10

ラウジッツ文化人を、カフカのように、原スラヴ人と結びつけるならば、やはりスラヴ語族がインド・ヨーロッパ語族に属するかぎり、スラヴ人の原郷問題は、インド・ヨーロッパ語族の拡汎の問題との関連で考えねばならない。第12図、清水陸夫氏によるラウジッツ文化圏を考えれば、<sup>(1)</sup>ボヘミア・モラヴィア北部からオドラ・ヴィスラ流域に広く展開している。カフカによればラウジッツ文化は新石器時代の農耕文明を継承した農耕民によって担われたとされる。ギンブタスによるクルガン文化人の西進、北上という点から見れば、ゲルマン人の形成のばあいのように、紀元前三千年紀以前に中部ヨーロッパにまで拡汎したクルガン人、飯沼氏のB経路に沿って、加茂氏によ

第12図



ラウジッツ文化の遺跡分布図

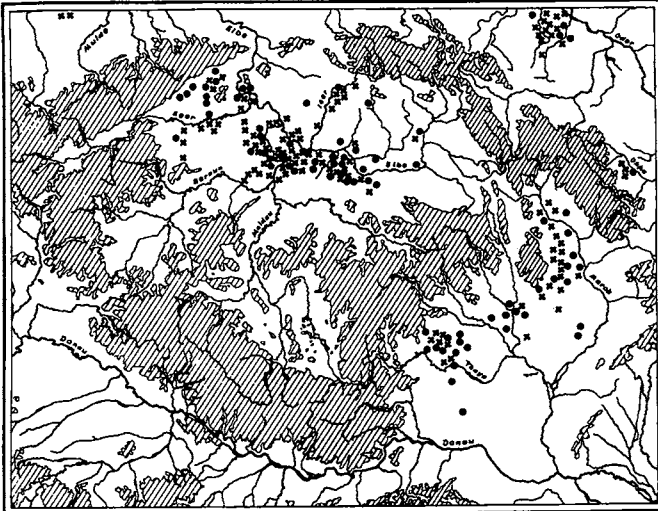
山川出版社『東欧史（新版）』21頁。

ればなお馬を家畜化していない半農半牧の牧民の北上となろう。こうした人びとが鈴木氏のいうヒブシサーマル高温期に飯沼氏のA経路に沿って西方から北上していた先住の農耕民と混淆し、森林・沼沢の地に入って牧民的性格を失い、農耕民としての性格を強めることになろうか。しかもこのラウジッツ文化をスラヴ人と結びつけようとするれば、ゲルマン人やケルト人のように西方系ケントウム語群に属するのはちがって、スラヴ語は東方系のサテム語群に属する点に注目しなければならない。

そうとすれば、何らかの形で、どの時代においてか、東方系サテム語群に属する語族との混淆もしくは強い影響を考えざるを得ない。

第12図に示されたラウジッツ文化が展開した地域とその西方に連なるいわゆるゲルマンの故地を含めて、新石器時代には漏斗状土器文化も展開していた。この文化の担い手につ

第13図



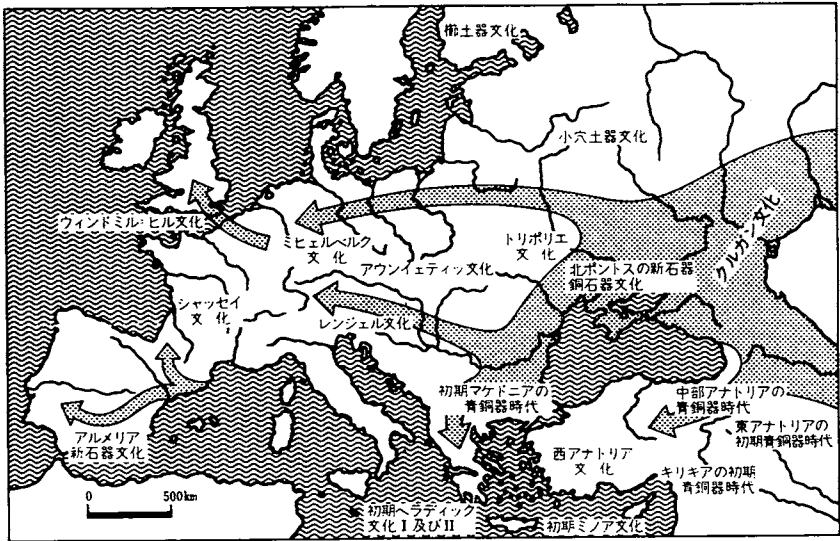
Karte 2:  
Verbreitung der Trichterbecherkultur (nach J. DRIEHAUS, E. PLESLOVA und  
K. JAZDZEWSKI)

- ältere Stufe
- × jüngere Stufe.

Mildenberger, "Handbuch. I", S. 46.

いては不明ではあるが、おそらく東方に由来するともい  
 われている。この文化は紀元前三千年紀後半には第13図  
 のようにボヘミア北部・モラヴィア西部にまで南下し、  
 おそらく寒冷化が進みはじめるなかでの逆流現象の最初と  
 もいえよう。さらに後れて有名な縄文土器（戦斧）文化  
 も東方から西進し、先の漏斗状土器文化と重なる。この  
 文化は馬と戦斧を使用したとされるが、なおインド・ヨ  
 ーロッパ語族ではないとされる。もしそうであれば、南  
 ロシアにあつて加茂氏によれば家畜化された馬の遺骨を  
 最初に出土したトリポリエ文化と結びつけられないであ  
 ろうか。黒海北岸に紀元前三千年紀に現われたギンブタ  
 スのいう第四期クルガン人、銅を知り、馬を飼うクルガ  
 ン文化人に圧迫されたトリポリエ文化人がカルパチア山  
 脈の北、森や沼沢の多い地方へと移動し、牧民的性格を  
 失いながらも馬を使用する農耕民としての性格を強める。  
 この縄文土器（戦斧）文化を担ったばかりでなく、飯沼  
 氏のいうD経路の農耕を伝播したと考えられないだろう  
 か。この文化がボヘミア・モラヴィアに現われるのは、  
 ウーニエティツェ文化が展開する直前であつた。ボヘミ

第14図



ヨーロッパにおけるクルガン文化の広がり  
ヘルム『ケルト人』 121頁

アの北方、オドラーヴィスラ流域に展開していた新石器時代のこうした農耕文化の上に、ウーニエティツエ青銅器文化が広がる。ヘルムのいう「最も豊かな文化」としてラウジツツ文化とウーニエティツエ文化を一括して取り上げる理由の一端もここにあるように思われる。

ヘルムはケルト人の起源をヴォルガ河畔に求め、その西漸、したがってインドヨーロッパ語族の西漸を、やはりギンブタスによるクルガン文化の広がりとする。そして提示した図が第14図である。第8図と比較して、おそらくこの図は、私なりに想像すれば、アウンイエティツ(ウーニエティツエ)文化が既に展開した後、少くとも紀元前一五〇〇年以降を想定しているように思われる。角田氏の紹介では紀元前三千年紀までのクルガン文化人に触れただけで、その後の少くとも紀元前二千年紀、しかもその後半に移動したクルガン文化人については触れられなかった。その性格が、とくにラウジツツ文

化、ひいては原スラヴ人の問題に接近する上で重要な意味を持つことになろう。とくにこの図のように、黒海北岸からドナウ流域を経ることなく、直接にカルパチア山脈の北を通る道が、もしこの時代を境に急速に開かれたとすれば、その意味は、ラウジッツ文化以後の歴史の展開、狭くいえばスラヴ民族形成の歴史の上に、大きく影響するように思われる。

- (1) 清水陸夫「第一章 第一節 古代の東欧」矢田俊隆編『東欧史（新版）世界各国史13』山川出版社、一九七七年 一一頁。および図「ラウジッツ文化の遺跡分布図」。
- (2) G. Mildenberg, a. a. O., S. 46 Karte 2 & S. S. 45—48.
- (3) 『カラー世界史百科』一四頁図、一五頁。
- (4) ヘルム『前書者一一一頁図、なおこの章「5 それはヴォルガ河畔で始った。」では、インドヨーロッパ語族の移動に触れ、アウンイェティツ文化の誕生までに及んでいる。一一〇—一四七頁。